ヒバクと健康 LETTER 通巻 44 2021-4-2

大石又七氏追悼 2021 年 4 月臨時号

一般社団法人 被曝と健康研究プロジェクト
http://hibakutokenkou.net/

大石又七さん夫妻のご冥福を心からお祈り致します

「お母ちゃんと店先で」と説明をつけた写真。大石又七、信子夫妻は東京でクリーニング店を開いた。

大石又七・信子 義兄夫妻の生き方にふれて

信子さんの妹、河村恵子さん

（静岡高教組志榛地区「味な平和ゼミナール」報告集より教組、河村さんの許可を得て転載。写真も）

大石又七さんが３月亡くなられた。

アメリカによるビキニ水爆実験のヒバク者、87 歳の生涯であった。

いまなお、私の携帯からは大石さんの番号は消すことが出来ずにいる。

3.11 以来、10 年近くに及ぶ交友だった。いつ会っても穏やかな笑顔で迎えていただいた。

その顔の奥には、鋭く強い意志を感じていた。閉じて間もない東京のクリーニング店の２階で、お互い涙をすすりながらお話を伺ったことが忘れられない。

ある時はお宅の近くで散歩のお供をした。

2012 年正月には、肥田舜太郎さん宅を一緒に訪れ、半日も語り合った。

この時又七さんは、「肥田さんに会えただけで幸せです」などと遠慮しつつも、いつになく冗舌だった。

私は、又七さんの言葉にハッとした事を鮮明に覚えている。

「ヒバクと言えば、広島・長崎から福島へ飛ぶんですね。間のビキニはあまり語られない。それだけ知らされていないんです。日米の政治決着で。原爆マグロくらいしか知らない方もいる。隠蔽されたからです」

被曝の隠蔽。それは、広島・長崎に始まり、ビキニ被曝、福島原発被曝、と今も続いているではないか。私は、この「話し合い」をきっとまとめようと思う。

その書を、大石又七、肥田舜太郎の両氏に捧げたい。合掌。　　田代真人

一般社団法人「被曝と健康研究プロジェクト」役員

顧問

有馬理恵 劇団俳優座女優

石塚健 医師

沢田昭二 名古屋大学名誉教授、理論物理、内部被曝研究者

曽根のぶひと 九州工業大学名誉教授

玉田文子 医師

西尾正道 北海道がんセンター名誉院長

本行忠志 大阪大学医学系研究科教授

益川敏英 ノーベル物理学賞受賞、名古屋大学特別教授・素粒子研究機構長、京都大学名誉教授

松崎道幸 北海道旭川北医院院長

矢ケ﨑克馬 琉球大学名誉教授

代表理事 田代真人 ジャーナリスト

理事 浅野真理、住田ふじえ

監事 三宅 敏文

◆「LETTER」の内容についてのご意見は下記へお寄せください。

一般社団法人 被曝と健康研究プロジェクト 代表　田代真人

〒325-0302 栃木県那須町高久丙４０７－９９７☎0287-76-3601

Ｅメール：masa03to@gmail.com

義兄夫婦の生き方と私

河村惠子

2020 年 11 月 3 日藤枝市生涯学習センター

大石又七さんの妻・信子さんの妹・河村惠子さん

皆様、こんにちは、初めまして。私は田舎の牧之原市から参りました河村惠子と申します。本日は、このような、立派な先生方の会合に、わたしのような老婆をお招き頂き、ありがとうございます、感謝と共に恐縮しています。

私の大切な家族たち

私の姉、信子（大石又七の妻）は、私より 10 歳年上で、昨年（2019 年）7 月に天に召されました。享年 82 歳でした。それをきっかけに姉のことを遺そうと思い、文芸誌に投稿しました。

私は、旧榛原町、今は牧之原市になっていますが、貧しい農家の 6 人兄弟、姉は上から２番目、私は下から二番目に生まれました。３人の兄弟がすでに天に召されています。兄弟みな仲良く、本が好きで、勤勉でまじめ、実直、何でも一生懸命やる、「何でも一生懸命」というのは父の口癖でしたが、私以外の兄弟はその通りにしようと努力していました。

姉もその通りで、近所のお寺さんが習字をほめてくださり、その和尚さんに無料で書道を習い、一生懸命取り組み、小中学校でもいろいろな賞を獲得しました。家の手伝いも一生懸命して、私達兄弟の面倒もよく見てくれるなど、素晴らしい人でした。

私の家族を（写真で）紹介します。これが私の最愛なる夫です。これが長男、次男、これが私です。昔は少しきれいだったんです。これは長男が７歳、次男が３歳の時。七五三なので写真屋さんで撮ってもらいました。当時、立ち直りつつあったので、複雑な思いはあったのですが、息子たちの写真はすべて写真屋さんで撮ろうと思いました。娘の写真は写真屋さんではなくてすべてスナップ写真ですけれど。

長男はこの頃まだ目が見えなかったですが、効くか効かないかわからないまま針治療を受けて、片目が見えるようになりました。娘が生まれて兄妹３人になります。娘は現在４０歳、東京で夫と、４歳と１歳の子の母親となり幸せな家庭を築いています。彼女は、小さい時からお兄さんたちが言葉を話すことができなかったので、自分がお兄ちゃんたちの分まで思いを発信するんだという思いが強くありました。小学生の頃から、「結婚しないで自立して、お兄ちゃんたちの分まで世界に発信するジャーナリストになりたい」という夢を強く持っていました。ニューヨーク州立大学に留学し、帰ってきてからはいまだにがっつりと報道に浸かっています。４歳と１歳の幼子は保育園に放り投げて。

父は腕のいい大工でした

私の父はもともと腕の良い大工で、日銭を稼ぎ、母は人を雇い、朝から晩まで、農地を耕していました。貧しかったので農業ができないときは土方に出ていました。夜は、榛原で、当時は珍しい紅茶を作り始めたといううわさを聞きつけて、紅茶の袋を糊で貼る内職を、夜は私と妹が加わり、３人でやっていました。私はその貧しさに耐えかねて、「将来は絶対金持ちになってやる」などと不埒な言葉で家族を困らせていました。

父は頭がよく、数字をとらえることや文章を考えることなどが必要だと考え、「百姓も読み書きそろばんがこれからは大切になる」と、近所の農家の人たちに、夜遅くまで読み書きそろばんを教えていました。私達子どもには、「電気代がもったいない、早く寝なさい」と言い、一言も勉強しろと言わず、早く床につかされました。その矛盾に、子ども心にとても腹が立ちましたが、このころから私は、ご飯を食べたら風呂に入って早く寝るという習慣が付いてしまいました。

姉信子は、熱心に協会に通っていました

我が家の斜め前に教会があり、姉は熱心に通って、聖書を愛読書のように何度も読んでいました。私と妹は、聖書も読めませんので誘われてもいやだと断りましたが、当時ビスケットしか食べたことはありませんでしたが、教会に行くと珍しかったバターの味のするクッキーをもらえると姉から誘われ、そんな理由で教会に通い始めました。私が小学校 4 年生、妹が小学校１，２年のころから、牧師のイギリス人、マクラクラン女史に、ただで、耳から覚える形で英語を教えていただきました。母が作ったジャガイモやサツマイモやホウレン草などをお礼に持っていきました。

センスがあれば英語を使えるようになるということを教えてもらいました。その英語との出会いで、私と妹の人生の航路が決まりました。私は失敗した口ですが、妹は、現在も世界で活躍しています。妹は大学を卒業してから、東京銀行のニューヨーク支店に勤めました。本当は官僚になりたかったようですが、公務員試験に落ちてしまいました。「日本が私を雇ってくれないならろくな国ではない」などとうぬぼれていました。

聖書を読み、高校生で洗礼受けた姉

姉は、当時両親の反対にも関わらず、熱心に聖書を読み、夜学でしたが高校の時に洗礼を受けクリスチャンになりました。姉は、人生すべての局面で、静かにまじめにひた向きに努力し、前に進む人でした。姉は中学を卒業し、夜間の高校に通いながら仕事をし、夜は洋裁学校に通い、とても器用な人で、私と妹の服も作ってくれました。その姉が、第五福竜丸乗組員・大石又七と結婚、田舎では、ピカドン、ピカドンと大騒ぎでしたが、我が家にもその言葉が降り注ぎました。私たちはまだ小さかったので、その恐ろしさは感じていましたが、その事件の本質は知らず、なんでそんなこと言われるのかな、貧しいと馬鹿にされるのかな、などと妹と話をしていたことを今でも覚えています。

姉は全てを封印し、大石又七さんと結婚

夫の大石又七さんと開いたクリーニング店で

しかし姉は、周りの騒ぎもすべて封印して、大石又七さんと結婚し、家で簡単に結婚式を挙げ、すぐに東京に行き、居を構えました。私の父は、ピカドンの当事者だから、東京という都会の雑踏にそっと身を沈め、目立たぬよう生きるつもりであっただろうと、涙を一杯ためて後に話してくれました。又七さんも、仕事と自分の健康の先行きの光の見えない中で選択肢はそれしかなかったと思ったのだと思います。そして運よく、親戚のアドバイスで、クリーニング屋に住み込みをして技術を身につけ、個人事業主としての道を決めたそうです。被爆後に東大病院に行ったときに、医者や看護師さんたちがアイロンプレスの利いた白衣を着ているのが印象的で、これは仕事になると、自分の不安はそっちのけで考えていた時期があったようです。当時は洗濯機もなく、固形せっけんで洗濯板を使って洗っていた時代でしたから、兄には先見の明があったようです。身を粉にして働くしかないと覚悟もしていたようです。

兄の選んだ店は、住所は大田区でしたが、「金持ちをねらえる」ということで田園調布高級住宅街と隣接したところに店を構えました。ホワイトカラーが多く居住している場所で、日常的にクリーニング屋を利用していたそうです。

兄も姉も仕事熱心、ボタン付け、そで直し、夜なべしてサービス

兄は、仕事を有意注意でやる人柄、姉も丁寧に細かいことにも神経が届く人で、丁寧な手作業で評判も良かったようです。衣類のボタン付け、裾直しなどの修理も姉が夜なべで丁寧にサービスしたこともあり、お店は繁盛していったようです。しかし、元第五福竜丸の乗組員であったことはすべて封印し寡黙を貫き、一人の都民として生きていました。

昨年の姉の葬儀の時、甥と姪は、「母は、働き者で夜中二時前には寝たことがなかった気がする」と、身を粉にして働き、大学にも進学させてくれて、懸命に生きた母親に感謝と尊敬のまなざしで語ってくれたことが印象的でした。

姉が私を東京に招き、激励してくれた

私は、頭もよくなかったので、父からは大学には行かせられないと言われていました。私より頭の悪い人たちが大学に行き始めた時期だったので、悔しくて、そんなときに、姉が、東京の代々木ゼミナールで、自分がどの程度の学力なのか試しに１か月いらっしゃいと招いてくれました。高校３年生の夏休みに、行きました。自分が希望する大学には受か

るが、特待生にはなれないという判定で、大学はあきらめざるを得ませんでした。父は、銀行にでも勤めて現金を家に入れてほしいと言いましたが、ここで話にのってはいけないと、苦学を決意し、津田塾大学付属の専門学校、津田スクール・オブ・ビジネス、予科・本科がありましたが、３年制を選び、入学しました。そこなら特待生になれました。

兄の家に居候しようとは思いましたが、そんな生ぬるい考えでは生きていけないだろうと思い、家賃月２０００円のぼろぼろのアパートに住み、アルバイトをしながら勉強することにしました。土曜日はお茶の水の教会で牧師さんに英語を教えてもらい、慶応大学の聴講生として政治経済を学び、そして週３回、夜学で英文速記を習いました。

それができたのもすべて、兄と姉の励ましと、衣食住の保障があったからで、私はそれに甘えていました。

クリーニング店に５年も居候して

私が、50 数年前、兄の家に居候をし、学業の応援をしていただいていた頃は、住み込みの若い人達が 3 人働いていました。そして、兄は時々、海釣りに出かけ、時に新鮮な魚をご馳走になりました。当時の私には、兄夫婦は必死に働いていたという記憶しかありません。それほど、都会は生きてゆくのには大変なんだと、漠然と私は思っただけでした。私は、5 年間、兄夫婦宅にお世話になりましたが、「ビキニ事件」について、一度も話を聞くことはありませんでした。私も自分の夢を追うことに精一杯で、自分勝手にやりたい放題をして、過去のことなど忘れた如く、無関心で、無責任で、そのくせ、高校時代、民青同盟にはいっていたので政治の在り方について、あれこれ生意気なことを言っておりました。当事者に一番近くにいながら、何事もないように過ごしていた自分自身が、今は情けなく、恥ずかしく思います。

何かの間違いで恋に落ち、破れ、都落ち

東京で生涯を、キャリアウーマンとして、世界で頑張るはずの私は、何かの間違いで恋に落ち、破れ、都落ちをして、現在に至ります。その時も、兄と姉は、優しく応援してくれました。私の体たらくを叱ることなく、励まされたことを覚えています。なんという不甲斐なさであったかと、恥ずかしい限りです。

東京で私は、原発を建設するエンジニアリングの会社に就職しましたが、その話を兄にしたらちょっと首を傾げましたが、がんばれよと言っただけでした。あとで聞くと言いたかったことがあったようです。そのころ大卒の給料が平均３５０００円くらいでしたが、その会社からは７万円くらいの給料をもらいました。能力があるからだろうとうぬぼれていましたが、実は、危険手当が入っていたのだということが後にわかりました。

原発売る仕事

当時の私の仕事は、外国の人たちを原発に案内して、燃料棒の近くまでスーツ姿で案内し、原発を売ることでした。設計図を見せながら説明したり、速記をしたり、議事録をつくったりする仕事の中で、私自身も実は被曝していました。詳しく言うと警察に捕まるので、

このくらいにしておきますが、兄はそれを憂いていたのだと思います。

そして今から 10 何年前でしょうか、東京築地市場の豊洲への移転問題がクローズアップし、議論が重ねられた頃、兄から突然電話があり「築地市場にあるマグロ塚が取り壊されそうだから、何とか取り壊さず、保存したい。新聞に投書してくれ」と言ってきましたので、私は、そんなことは朝飯前だよと朝日新聞に「築地マグロ塚保存を」「ビキニ事件を風化させないために」と、偉そうに、投稿し、掲載されました。

又七さんの依頼で河村さんは、マグロ塚保存のために新聞に投書した

マグロ塚は紛れもなく、第五福竜丸が運んできた水爆被爆マグロを、築地のあの場所に埋めた証でもあります。兄は私の投稿を本当に喜んでくれました。

伝えたい、歴史に刻みたい、との兄の思い

そのころから、兄は黙して語らずの生き方から、何らかの形で伝えたい、歴史に刻みたいという思いになったようです。マーシャル諸島でのアメリカ水爆実験被害を語って行こうと、行動を始め、多くの人の応援もあり、本も数冊出しました。生き証人として、語り部として、核のある世界を続けてはいけないということを高校生や中学生に、兄の言葉で当事者として語り続ける活動を始めました。

「今度何月何日、何 TV で福竜丸の放映があるから」と電話があり、見たことを覚えています。兄は、私が夫の家族と共にする生活があることを知っておりましたし、私の子どもが 2 人重度の障害児ということもあり、両親には言わないほうが言いとアドバイスをしてくれました。私は、父母に言うことなく、ビデオに録画し、夜遅く夫と娘と見ました。何と愚かしい自分であったことかと思います。

郷里の中学校体育館で講演した

ある時、兄の故郷の榛原郡吉田町の吉田中学の体育館で、講演をするから、来てくれないかと電話がありました。会場はいっぱいでした。みな息を殺して、兄の話に耳を傾けておりました。私は、兄はこんなに変わったのだと驚き、覚悟して全てをさらけ出して、自分の故郷で講演する兄の逞しい姿に涙が止まりませんでした。

焼津にとどまるという決断をせず、故郷を捨て東京の雑踏に紛れて身を隠した時、兄は苦しんだと思います。しかし今、堂々と故郷の地で「核廃絶」を全身の力を振り絞るがごとく語る兄の生き様に感激し、私自身もこうでなければいけないと励まされました。どんな人でも生きる意味・価値はある、私の障害のある子どもたちも、何もできないけれど絶対に生きている役目はあると、信じることができるようになりました。

第 5 福龍丸は、東京夢の島にゴミとして捨てられていた

平和への道標、語り部として

兄は、自身のこの世に行きる役目を、「核廃絶の道を開くこと」に決めたのだとわかりました。人間は、「必ず例外なく死ぬ。だからからこそ命をかけて核廃絶を掲げ、平和への道標を開いていくための語り部になることだ。それが自分の役割だ」と常々語っていたことを思い出します。

東京の夢の島にゴミとして捨てられていた第五福竜丸を「反核平和を願うシンボルに」という運動を知り、兄は、福竜丸が再び平和に向けて、人々の心の中を就航すると同じく、自分の船も「核廃絶の道を開く、希望の航路を就航するべく」舵を握ったのだと思います。尊敬に値する兄です。

原爆はだれがため原発はだれがため
問えば重たしこの国の明日

姉信子の生きる覚悟

日本は、昭和 20 年 8 月に、広島、長崎に 2 発の原子爆弾が投下され、多くの国民が被爆し、被爆死者、被爆者を出しました。その時の惨劇は皆さん、十分ご承知と思います。黒焦げの死体がゴロゴロ、やけどで爛れた皮膚、川で水を求めながら重なり合って命を落とした広島市民、さらに数日後、今度は長崎で原爆が投下され、数日後日本は、敗戦、第二次世界戦争は終わりました。

そのころ、「ああ許すまじ、原爆を、三度許すまじ原爆を・・・」という歌が巷で、全身を絞るように歌われたそうです。姉はそのころ出版された「原爆の子」という本を貸本屋で何度も借りて、涙を流して読んでいたそうです。貸本屋のおばさんが、あげるよと譲り受けるほどだったことを、父と母が鮮明に覚えていたと後に話していたことを子ども心に覚えています。

兄との結婚も、姉はそれなりの覚悟と知識を持っていたのだと思います。

広島、長崎の原爆は絶対悪です。情報が少ない世界で、当然、多くの国が、アメリカに怒りを発信したであろうに、9 年後、マーシャル諸島で、水爆実験が行われ、「第五福竜丸」その他あの地域で操業していた船舶も、水爆の、キノコ雲の被害に遭いました。なんという愚かしい悲惨な事件でしたでしょう。

大石さん自作の第 5 福竜丸模型 2019.12.8 三崎にて

原爆落としたから、戦争が終わった、のか？

アメリカではいまだ、原爆を投下したから戦争が終わり、日本人を含め多くの命が救われたという意見が多いと聞きます。核兵器は「国防の要」との意識も根強くあり、トランプ大統領もそう言っていると聞きます。核兵器や放射能に肯定的なアメリカに、どのように、核廃絶の道が開けるか私にはまだわかりません。娘から聞いた話ですが、アメリカでは今、テレビドラマで、「ナガサキする」という造語がつくられ、破壊という意味で使っているそうです。人を傷つけるような造語がたくさんありますが、人を差別したりバカにしたり傷つけるような造語はつくってはならないと、娘もつくづく言っていました。

これも娘から聞いたことですが、ラスベガスの国立核実験博物館では原爆の爆風を体験する「爆風体験」をすることができると聞きました。いくらかかるのかは忘れましたが、3 度の世界唯一の被爆国の日本と、原爆に対する感覚がアメリカとは全く違っています。本当の真実は日本人こそが知っていると私は思います。

「核兵器禁止条約」・・・日本は率先して批准を

アメリカも日本も「核兵器禁止条約」の批准すらしていません。本来であるなら、日本こそが、率先して条約を批准し積極的に全世界に向けて働きかけねばならないと思います。日本の政府は愚か過ぎます。しかし、先週 50 か国の国と地域が批准するようになったので、核兵器禁止条約は批准され来年 1 月に発効することになりました。被爆国の日本はしかり、大国が批准していなくて、核が多く地球上に存在していますが、まずは、５０か国以上の批准や発効が、新しい一歩だと喜んでいます。日本は、唯一の被爆国でありながら、アメリカの傘の下にあって何も言えないことが私には不思議でなりません。

新総理の菅さんの所信表明でも、核兵器禁止条約の話は全くありませんでした。がっかりしました。娘は、そういう話を皆さんの前ですると、おかあさんはアカだとか、よからぬことを言われると心配してくれて、くれぐれもひとりの老婆の言葉にすぎないとしっかり伝えなさいと娘からきつく言われています。

映画「西から昇った太陽」を見た

そして 9 月 23 日、焼津市の集会で「西から昇った太陽」という映画を見ました。キノコ雲の下で、兄や乗組員たちは、何を思ったか、あらためて考えさせられました。恐怖しかなかったと思います。兄の大石又七の家はお父さんがいなくてお母さんが働き、子どもを 5

人育てるという貧しい家で、中学卒の兄が、遠洋漁業で稼ぐしか生きる道はなかった。あの航海は、最年少で中学を卒業したばかりで何の知識もない時だったと、後に語ってくれました。

この映画は、アメリカの若きカメラマンが、アメリカ First とトランプ大統領が豪語しているアメリカの若者に歴史の真実を伝えたいと、「核廃絶」を願いメガホンを握ったと聞きました。素晴らしい映画でした。一人でも多くの若者に、おとなに見てほしいと思います。

「焼き場に立つ少年」のこと

穏やかな顔、強い意志 2019.12.8 三崎市で

皆さん、長崎の原爆投下の被爆地で、「焼き場に立つ少年」と題した写真をご覧になったことがあるでしょうか。幼い弟の亡骸を背負い、火葬する順番を、歯を食いしばって直立不動で待っている少年の写真です。あの写真はアメリカの従軍カメラマンが、被爆地で撮影したものです。彼は、原爆投下国のアメリカ人ですから、ずっとその写真やそれら付随する情報を封印していたそうです。

しかし、1989 年、戦後 44 年経過して、このまま封印していてよいのかと問い、精神的にさいなまされ、病気にもなり悔む日々でしたが、やはり一人の人間として、核戦争を繰り返さないことにつながるのなら、という思いで、写真展を開いたそうです。原爆を投下した側の人間がこの写真展を開くには、相当な覚悟が必要だったと思います。85 歳で亡くなるまで、批判を覚悟しての写真展を続けたと聞きます。私もあの写真は何回も見ました。あの少年の消息を追ったそうですが、結局わからなかったそうです。彼の死後、奥さんや娘さんが、遺志を継ぎ、協力して写真展を再開したと、新聞の隅の、小さい記事を読みました。

「西から昇った太陽」の映画も、多くの人、子どもたちに見てほしいと強く思います。

寒村ゆえに核のゴミ 10 万年と
20 億円の天秤ゆるる

原発は「クリーン、安心、安全エネルギー」ではない

私も原発を建設する会社にいましたので知っていましたが、原発は最終処分を考えることなく、「クリーン・安心・安全エネルギー」として、全世界、日本全国の過疎地に大金を投じて誘致されました。そして 3.11 の東日本大震災で、福島第一原子力発電所が水素爆発を起こしました。当時は民主党政権でしたので、日本経済を動かす人たちとのパイプもなく、アメリカ軍があの時海水でもよいから注入すると言っ てくれたそうです。もちろん真水も注入すると言ってくれたそうですが、民主党にその知識がなかったので断ったそう

です。それで被害をさらに大きくしました。
あの被害にあいながら、まだ日本は停止している原発を再稼働しようとしています。核のごみ処分を巡り、北海道の神恵内村と寿都町が 20 億円につられて、文献調査の実施に手を挙げました。

放射能にはだれも責任を持てません

放射能が安全レベルに下がるまでには、私がいたときでさえ数万年から数十万年かかると言われていました。誰も責任が持てません。地球の破壊ともなりかねない、高レベル放射性廃棄物を地下深く埋めるなどということがあっていいのでしょうか。未来にそんなものを残してよいのでしょうか。誰が安全だというのでしょうか。原発が稼働している限り、廃棄物は永久に生まれ、処分地が必要になります。そんな地球にしてよいのでしょうか。無制限に増え、歯止めが利かなくなります。今の政策を続けるのか、原発依存から脱却を目指すのか、基本的な立ち位置が、世界から問われていると思います。

私は、昭和 22 年生まれ、戦争を知らない人間ですが、私が知る戦争とは、また違った不気味さが日本を、世界のあちらこちらを包みこんでいるような気がします。もちろん、コロナもそのひとつですが、生きてゆく事は、もちろん苦の川や、谷をどうしても渡らなければなりませんが、人間の力が及ばないことはやるべきではないと思います。

原爆は絶対悪です。広島、長崎の原爆投下、第五福竜丸の被爆、唯一の被爆国、わが国日本が核廃絶の発信をして行かずして、誰が、旗を振れるか？ 時代がどのように変わろうと、このままでは、核のない世界は来ません。

デモもせずストも忘れたこの日本
　　長いアメリカに巻かれて生きる

今日いまを明日という武器で軽んじる
　　日本の首相の悲しき保身

海ゆがみ津波を起こす人歪み
　　他国を攻めるゆがむ恐ろし

原発から都会に続く送電線
　　民の暮らしを大きくまたぐ

現実を変えることは出来ないが
　　未来を変えること今できる

虹消えて地球に核の残りけり

（写真を転載するにあたって、河村さんの友人、粕谷たか子さんの協力を得ました）